

新しい試みとして、学生の活動団体と就職部が協力した「インターンシップ・ガイダンス」が5月19日に行われた。土曜日にもかかわらず、会場は多くの学生で埋まった。第一部では(株)リクルートの「就職ジャーナル」前編集長の石川純一氏がパワーポイントを使い、表やグラフを多用して、キャリアデザインとインターンシップの有効性について話してください。

(学生記者・真田季実子)



「学びのキャリア」の必要性 を自分の言葉で語れるか

石川氏は、まず20代は「自分探し」として、キャリアデザインの説明から入った。現代の職業観では、卒業後の進路が就職以外の選択肢を持つ時代であり、皆の自己責任でキャリアを考えるようになってきた。進路に満足している先輩は低学年時から将来に進路を想定し、目的や目標を



▶講演する石川純一氏
▲会場を埋めた「インターンシップガイダンス」の学生

持って正課や課外プログラムを活用し、進路目標を達成している。20世紀には年功序列や終身雇用制があったため、有名企業に入って人気企業を目指すのがよいとされ、学歴を尋ねても学習歴は問わなかった。

日本のキャリアとは、転歴一般を指すが、アメリカでは、その人の生き方や学びや余暇、家族、職業などを市民としての生活態度と結びつけて表現される。そこで今まで学校や会社から自分の生き方が決められてきたが、これからは自分の生き方を先に決め、それが可能な仕事を探し求める形となっていくだろう。

大学のレジャーランド化は終焉し、学習歴に企業は顕在化された資質を求めるようになっていく。その傾向として、職種別採用の増加があげら

れる。これは従来、選択できなかった職種が選択できるものの、「学生のうちに専門性を身につける」というもので、入社のバーが高くなったことを表す。これは、やる気のある人にとっては良い傾向だ。また、学問の専門性とは基礎的な学問を学ぶと同時に、学びの楽しさや意味・習慣を学び、自分の思考や価値観を知り、ある特定分野では誰にも負けないうものを作る、ということである。

「ここでいう「学ぶ」という意味は、広辞苑によると、「真似をする」ということになる。真似をする、つまり

適職とは、社会を知ることからスタートするのだ

では、適職とはなんだろうか。「それは社会を知ることからスタートするのだ」と石川氏は語る。経験することによって、まず向き不向きを確かめる。そのきっかけとなるのがイ

りお手本となる先輩を探すことが自分探しのヒントになりうる。「学びのキャリア」にも、TOEIC、各種の資格、留学などがあるが、なぜ必要なのかを自分の言葉で語ることができるだろうか。

TOEICでハイスコアを獲得しているにもかかわらず、就職に漏れたケースに対して、(株)ホンダの場合「英語という手段よりも、どう生きていきたいのか、どんな仕事をしたいか、どんな仕事をして社会に貢献していきたいのか。それを自分の言葉で語れる人材が必要だ」としている。

国際ボランティア報告会も



があげられる。インターンシップを選択する際の重要な視点は、①実力がつかどうか②実力が求められているかどうか③高い専門性がつくかどうか、であり知名度よりも仕事のレベルを優先すべきである、としている。

さらに大学に戻った後、なにを主体に勉強するのかを見極めることも

このイベントに先立ち、4月21日には「国際ボランティア報告会」が開かれた。これは昨年、国際交流センターが主催した「国際ボランティア・インターンシップ」をテーマとした説明会を「国際ボランティア」だけに絞ったもので、学生相談室主催の形で行われた。

この報告会では、カウンシル(国際教育交換協議会)の代表の方が、社会貢献・共同生活・国際交流を目的とする国際ボランティアについて説明し、カウンシルが主催する夏の

重要である。学生時代の時間は有効である。未来に向けて、きょう何をすることが大切だ、ともいわれた。

各種プログラムの紹介があった。また、昨年のプログラムに参加した方の体験談を聞くこともできた。

カウンシル代表部、峰さんの話によると、国際ボランティアへの参加希望者は年々増えており、中大だけでなく、他の大学にも説明のために足を運んでいるそうだ。

この報告会をきっかけに、自分の目的に合ったボランティア活動を探し出し、この夏にぜひ、貴重な体験をしてほしいと思った。

最初に生き方、そして仕事を

(この項、学生記者・中西 奈緒)